

まくわ瓜　－　狸（たぬき）との闘い

「ねえ、まくわ瓜（うり）食べた～い」とわたしは亭主殿にリクエストする。

まくわ瓜は日本古来からあり、万葉集で山上憶良（やまのうえのおくら）が「瓜食（は）めば子ども思ほゆ」（瓜を食べると子どものことが思われる）と歌った瓜が、このまくわ瓜らしい。今では西洋種のアメロンに押されて、スーパーで見ることはほとんどない。

わたしはこのまくわ瓜が大好きだ。アメリンのしつこいような感じがなく、ひなびた甘さと香りがいい。



問題は、完熟しないと甘くならないことで、完熟すると、尻にひびが入ったように丸い線がいく筋かときれときれに入る。たぶん中が膨れて、硬い皮が割れてくるのだ。山口のこの辺りではこれを「輪をかいた」と呼ぶ。しかし家の近くの産直店で売っているまくわ瓜は輪の入らない完熟前がほとんどで、今ひとつ甘くない。輪をかいてしまうと腐りやすいからなのだろうが、一番うまいまくわ瓜ではない。

つまり、自宅で作らないと完熟のまくわ瓜は食べられないのだが、畑で完熟すると、甘い香りがあたり一面に漂う。それはもう、人間でさえ3メートル先から感じるほどの強烈な香りなのだから、鼻のいい野生動物ならば10メートル先から感じるだろう。

そう、まくわ瓜は狸（たぬき）の大好物なのだ。

ここ何年かの間に、ウチの亭主だけでなく、隣のタケちゃんも裏のマツさんもまくわ瓜を植えて、全員の畑でひとつ残らず全部、実を狸に食われた。「ああ、はがいい（腹が立つ）。狸に食わせるためにつくったんじゃあなあで」と3人も嘆く。「やっちゃあおれん。はあ（もう）つくらん」

「ねえ、どうにかならん？」とわたしは亭主にねだる。「熟れたまくわ瓜、

食べた〜い」。

「じゃが、狸がなあ」と亭主は首を振る。

「畑に罾(わな)かけたらどうね。ホームセンターに罾、売ってないかねえ」

「……狸、取ってどうするんだ？」

「そりゃ、ゴメンナサイ、言うて罾の檻(おり)ごと川に沈める」女は残忍だ。

「……可哀そうな」優しい男は眉をひそめる。

「ほいじゃが、ほかに手がある？」

「周りをネットで囲う。去年一重で囲うてダメじゃったから、今年は二重に囲う」

というわけで、亭主殿は今年、畑の一面にマルチと呼ばれる黒いシートを草よけに敷き、穴を開けて小玉すいかとまくわ瓜の苗を植えた後で、周りに棒を立ててネットをめぐらせた。こんなめんどくさいことを、愛する女房のためにわざわざやってくれたわけだ。

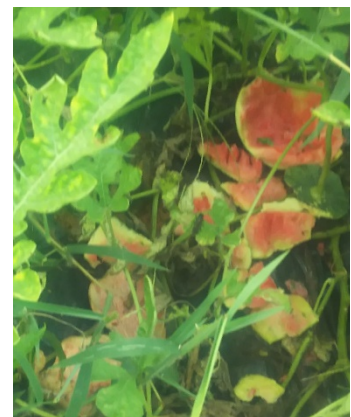
「これで大丈夫？」

「いや、熟れてきたらもう一枚ネットを低めに足して、ネットの端を古瓦で押さえる。上にも、鴉(からす)よけに目の粗いネットをかける。」

「それなら万全やね」

ところが、茨城の夏祭で太鼓を叩くために家を空けていた1週間の間に、すいかが1個やられていた。その3日後にはさらに2個。狸は土を掘って、ネットの下を潜り抜けたのだ。瓦が15枚では間が空いていたらしい。

「ええい、狸のヤツ。大玉すいかなら狸の口には大き過ぎるし、皮が硬いから無事なんじゃが、小玉すいかなら小さいし、皮もやおい(柔らかい)けえ、喜んで食いよる。それも、そろそろ熟れてきたかな、明日くらいもごうか、ちゅうころにやられる。ほん(ほんとうに)はがいい。」



「鴉もじゃが、よう熟れた時期がわかるねえ。匂うんかねえ」

「どうやってかわからんが、とにかくよう知っちょる」

亭主は瓦をさらに5枚足した。するとこの後、狸がすいか・まくわ瓜ゾーンに侵入することはなくなった。

みごと、狸に勝ったのである。

やったね。

あんたはエライっ。

あとは完熟を待つのみ！

しかし。

それから亭主は毎日、さあ今日はまくわ瓜の尻が輪をかいたか、と腰をかがめて見るのだが、なかなか輪をかかない。そのうち、輪をかいて芳香が漂い始める前に、まくわ瓜の実が自然にヘタから取れ始めた。連日の猛暑で土が乾き、毎夕水を撒（ま）いているとはいえ、根が吸い上げる水分量より、葉から蒸発する水分量の方が多くなって、実を保たせることができなくなったのだ。

やむを得ず完熟前に採って冷蔵庫で冷やしたまくわ瓜は、ほのかに甘いのみ。

結局、狸との戦いには勝ったのだが、今年も完熟のまくわ瓜は食べられなかった。

なんと、残念……。

来年こそ！